

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P5870 参照



※ P5873 参照



※ P5881 参照

2023.11
No. 771

目次

[大学の動き]

- 盛山正仁 文部科学大臣が、iPS 細胞研究所 (CiRA) と高等研究院物質—細胞統合システム拠点 (iCeMS) を視察 5870
- 名誉教授の称号を授与 5871
- 野崎理事と管理職による職員育成に関する意見交換会を開催 5871
- 令和5年度大学院秋季学位授与式を挙行 5873
- 令和5年度大学院秋季入学式を挙行 5878
- 学生2名に令和5年度「京都大学総長賞」を授与 5879
- 「京都大学 ELCAS2023」を開催 5880
- 「京都大学アカデミックデイ 2023」を開催 5881

[部局の動き]

- 第16回次世代グローバルワークショップを開催 5883
- 人文科学研究所人文情報学創新センターの開所式を挙行 5883
- 「宇治キャンパス若手研究者交流会」を開催 5884
- 「ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム (HFSP) から世界へ」を開催 5885

[寸言]

- 自ら考え やりきる力 寺田 健志 5887

[随想]

- 科学をめぐる事情の転変
名誉教授 石黒 武彦 5888

[洛書]

- 研究はマラソンに似ている? 近藤 圭介 5889

[榮譽]

- 玉尾皓平 名誉教授が文化勲章を受章 5890
- 森 和俊 理学研究科教授が第28回慶應医学賞を受賞 5891
- 山下真由子 理学研究科准教授がマリyam・ミルザハニ・ニューフロンティア賞を受賞 5891

[話題]

- 学生総合支援機構が「障害者雇用優良事業所等 京都府知事表彰」を受賞 5892

[訃報]

- 巽 友正 名誉教授 5893
- 金子 佳生 教授 5894



京都大学

所属・職名については、行事開催時点のものです。

盛山正仁 文部科学大臣が、iPS 細胞研究所 (CiRA) と高等研究院物質—細胞統合システム拠点 (iCeMS) を視察

盛山正仁 文部科学大臣は 10 月 1 日 (日) に本学を訪れ、iPS 細胞研究所 (CiRA) と高等研究院物質—細胞統合システム拠点 (iCeMS) を視察されました。

盛山大臣は、まず CiRA を視察され、湊 長博 総長、高橋 淳 CiRA 所長、山中伸弥 同名誉所長・教授兼京都大学 iPS 細胞研究財団理事長らと iPS 細胞研究の現状などについて、意見交換を行いました。また、盛山大臣は CiRA の第 1 研究棟を視察され、吉田善紀 同准教授から iPS 細胞由来の心筋細胞について、高島康弘 同准教授からナイーブ型 iPS 細胞^{*}について説明を受けられました。

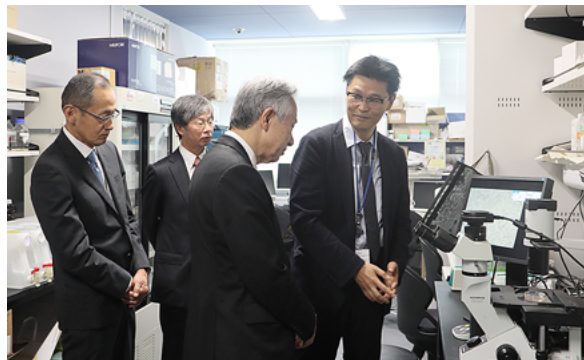
次に、盛山大臣は iCeMS を訪れ、上杉志成 iCeMS 拠点長から拠点の研究や取組の概要の説明を受けたのち、深澤愛子 同副拠点長の案内により最新の研究設備やオープン・オフィスなど拠点内を視察されました。続いて、時任宣博 理事・副学長や鈴木 淳 同副拠点長らも交えて、これからの拠点のあり方などについて、意見交換を行いました。



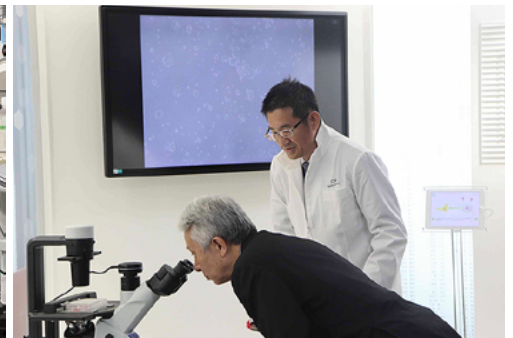
左から、山中名誉所長、盛山大臣、高橋所長



意見交換会の冒頭で挨拶される盛山大臣



オープンラボで吉田准教授と対話する盛山大臣



ナイーブ型 iPS 細胞を観察される盛山大臣 (説明者は高島准教授)



挨拶される盛山大臣



拠点の概要を説明する上杉拠点長

大学の
動き



研究設備の案内をする深澤副拠点長



iCeMS および本学側の参加者



盛山大臣と文部科学省、
iCeMS 関係者

視察を終え、盛山大臣は、文部科学省による基礎研究振興の重要性について言及し、大学を後にされました。

※ナীব型 iPS 細胞：より初期の発生段階の胚に近い性質を持つ iPS 細胞。通常の iPS 細胞は「ブライム型」と呼ばれ、区別される。

(総務部 (総務課))

[目次に戻る ↗](#)

名誉教授の称号を授与

9月21日付けで次の1名に京都大学名誉教授の称号が授与されました。

氏名	推薦部局
文 世一	経済学研究科

(人事部 (人事企画課))

[目次に戻る ↗](#)

野崎理事と管理職による職員育成に関する意見交換会を開催

本年7月から9月までの間、野崎治子 理事 (特命事項：研修担当) が各共通事務部 (部局事務含む) や事務本部延べ22の事務部管理職職員と、本学職員の資質、能力向上および研修の質的向上を図ることを目的に、現状の課題や研修内容への要望、人材育成方針などについて意見交換を行いました。

大学の
動き

各部署から共通で挙げられた課題として、国立大学法人化以降の定員削減の結果、職員1人当たりの業務負担が大きくなり、膨大な業務処理に日々追われている現状、若手職員に対して丁寧に業務を教える時間が取りづらく、OJT (On the Job Training) の機能低下による職員の業務の質の低下、定期異動によりスペシャリストが育ちにくい現状を危惧する声がありました。

特にルーティン業務を主とする部署では、業務処理に追われてモチベーションが保ちづらいという意見があり、野崎理事から、業務書類に目を通すだけではなく、現場に赴いてコミュニケーションを図るなどの対話する機会や、自部署の役割を俯瞰的に見る機会作りの提案に加え、やめる仕事、続ける仕事の整理は、管理職が覚悟しないとできないとの指摘がありました。

ダイバーシティ推進に関連して、女性の採用や管理職も増えつつあるが、ライフイベントを控えた職員が昇任を躊躇しているという現状について、野崎理事からは、ライフイベントが落ち着く時期を本人に確認しながらキャリアを後押しすると良いとのアドバイスがありました。

最近の研修に対しては、コロナ禍以降急速に進んだオンライン化により、いつでもどこでも受講できるメリットがある一方、参加者間のネットワーク形成が弱まるデメリットも挙げられ、研修をきっかけとする職場間の理解や交流を要望する声が多く、対面による集合研修の再開を検討してほしいとの意見が多くありました。

受講した研修をタイムリーに活用する場面の演出、研修の振り返りを兼ねて職場に報告する重要性など、野崎理事の民間企業で培われた経験に基づくアドバイスによって、頭を悩ませていた管理職職員に安堵の表情が広がるなど、予定の90分を超えて意見交換を行うケースも見られました。

また、管理職職員からは、今年度より導入した大学職員向け e-Learning 研修 (民間企業提供) について、隙間時間を有効活用して受講できるので、ぜひ職員全体に展開して欲しいなどの声も挙がりました。

人事部としては、本意見交換会を踏まえ、スキルアップ系の研修はオンラインを中心に、階層別研修は対面を中心にするなど、研修内容に見合った効果を検証しながら企画してまいります。なお、今年度より「OJT トレーナー研修」を開催することとしており、OJT の質の確保に努めてまいります。

さらに、人材育成上の諸課題に対処するため、各部署で独自に実施されている様々な取り組み



意見交流会の様子

を好事例として全学に共有するなど、働く上でのモチベーションの維持・向上、職員の更なる能力開発に向けた効果的な研修の企画や立案を実施してまいります。

このたびは、さまざまな制約の中で組織マネジメントに取り組まれている管理職職員の真摯な姿勢や熱量を力強く感



部署の業務説明を受ける野崎理事

じられる機会となりました。ご協力いただいた管理職職員のみなさま、意見交換会の事前準備から当日のご対応も含めてお忙しい時間を割いていただき、誠にありがとうございました。

(人事部(職員育成課))

[目次に戻る](#)

令和5年度大学院秋季学位授与式を挙行

9月25日(月)、百周年時計台記念館において、湊 長博 総長、教育・学生・入試担当理事、関係部局長などの出席のもと、令和5年度大学院秋季学位授与式を挙行しました。

湊総長から、代表者に対し学位記が手渡された後、総長の式辞がありました。

学位授与者数は次のとおりです。



学位記授与の様子

修士

学位名	2023年9月15日、25日付け			左記のうち留学生数 [※]			累計
	男	女	計	男	女	計	
修士(文学)	0	0	0	0	0	0	5,556
修士(教育学)	0	0	0	0	0	0	1,692
修士(法学)	0	0	0	0	0	0	1,581
修士(経済学)	6	5	11	6	5	11	2,141
修士(理学)	5	2	7	5	2	7	12,395
修士(医科学)	0	0	0	0	0	0	463
修士(人間健康科学)	0	0	0	0	0	0	821
修士(薬科学)	0	0	0	0	0	0	743
修士(工学)	2	2	4	1	2	3	36,051
修士(農学)	10	8	18	7	5	12	11,896
修士(人間・環境学) ^{※1}	0	0	0	0	0	0	4,077
修士(エネルギー科学)	7	1	8	6	1	7	3,204
修士(地域研究) ^{※2}	1	3	4	0	0	0	496
修士(情報学)	18	1	19	11	1	12	4,402
修士(生命科学)	4	4	8	4	3	7	1,756
修士(総合学術) ^{※2}	0	1	1	0	0	0	71
修士(地球環境学)	3	5	8	1	5	6	794
修士(文学) ^{※3}	2	3	5	2	3	5	30
修士(グローバル経済・地域創造) ^{※3}	2	3	5	1	3	4	5

大学の
動き

学位名	2023年9月15日、25日付け			左記のうち留学生数 [※]			累計
	男	女	計	男	女	計	
修士（社会健康医学）	-	-	-	-	-	-	66
修士（薬学）	-	-	-	-	-	-	2,299
総計	60	38	98	44	30	74	90,539

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

※1 修士（人間・環境学）は、累計に一貫制博士課程の修士修了相当授与者9名を含む

※2 修士（地域研究）および修士（総合学術）は、一貫制博士課程の修士修了相当授与者のみ

※3 国際連携教育課程

修士（専門職）

学位名	2023年9月25日付け			左記のうち留学生数 [※]			累計
	男	女	計	男	女	計	
社会健康医学修士（専門職）	1	2	3	1	2	3	597
公共政策修士（専門職）	0	0	0	0	0	0	643
経営学修士（専門職）	1	0	1	0	0	0	1,289
総計	2	2	4	1	2	3	2,529

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

法務博士（専門職）

学位名	2023年9月25日付け			左記のうち留学生数 [※]			累計
	男	女	計	男	女	計	
法務博士（専門職）	0	1	1	0	0	0	2,766
総計	0	1	1	0	0	0	2,766

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

博士

■課程博士

学位名	学位授与者数（下段は留学生の内数 [※] ）									総計	累計
	2023年5月23日付			2023年7月24日付			2023年9月25日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
博士（文学）	0	0	0	0	0	0	1	1	2	2	1,528
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（教育学）	1	0	1	1	1	2	2	0	2	5	296
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（法学）	0	0	0	0	0	0	1	2	3	3	550
	0	0	0	0	0	0	1	1	2	2	
博士（経済学）	1	1	2	0	1	1	0	2	2	5	834
	1	0	1	0	1	1	0	2	2	4	

大学の
動き

学位名	学位授与者数（下段は留学生の内数 [※] ）									総計	累計
	2023年5月23日付			2023年7月24日付			2023年9月25日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
博士（理学）	3	1	4	2	1	3	6	3	9	16	7,132
	1	1	2	1	1	2	4	3	7	11	
博士（医学）	19	5	24	13	1	14	6	2	8	46	16,502
	0	1	1	1	0	1	2	0	2	4	
博士（医科学）	1	0	1	1	0	1	0	1	1	3	152
	1	0	1	0	0	0	0	1	1	2	
博士（社会健康医学）	3	0	3	1	0	1	0	0	0	4	133
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（人間健康科学）	1	1	2	0	0	0	0	0	0	2	116
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（薬学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,481
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（薬科学）	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	177
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（工学）	7	1	8	5	0	5	15	4	19	32	7,945
	3	1	4	1	0	1	9	4	13	18	
博士（農学）	0	1	1	0	0	0	4	5	9	10	3,859
	0	0	0	0	0	0	3	5	8	8	
博士（人間・環境学）	1	0	1	2	1	3	2	5	7	11	1,094
	1	0	1	0	0	0	1	2	3	4	
博士（エネルギー科学）	0	0	0	1	1	2	5	1	6	8	469
	0	0	0	1	1	2	3	1	4	6	
博士（地域研究）	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	317
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（情報学）	1	0	1	1	0	1	13	1	14	16	852
	0	0	0	1	0	1	7	1	8	9	
博士（総合学術） ^{※1}	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（生命科学）	0	1	1	0	1	1	4	2	6	8	509
	0	0	0	0	0	0	1	2	3	3	
博士（総合学術） ^{※2}	0	0	0	0	0	0	3	0	3	3	32
	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	
博士（地球環境学）	0	0	0	0	1	1	3	2	5	6	246
	0	0	0	0	1	1	3	2	5	6	

大学の
動き

学位名	学位授与者数（下段は留学生の内数 [※] ）									総計	累計
	2023年5月23日付			2023年7月24日付			2023年9月25日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
博士（経営科学）	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	29
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（ゲノム医学）国際連携	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
総計	38	11	49	28	8	36	67	31	98	183	44,257
	7	3	10	5	4	9	35	24	59	78	

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

旧制9,651含む

※1：情報学研究科修了 ※2：総合生存学館修了

■論文博士 令和5年5月23日付け、7月24日付け、9月25日付け

学位名	学位授与者数									総計	累計
	2023年5月23日付			2023年7月24日付			2023年9月25日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
博士（文学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	669
博士（教育学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	180
博士（法学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	204
博士（経済学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	409
博士（理学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,578
博士（医学）	7	3	10	2	1	3	6	0	6	19	2,299
博士（医科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
博士（社会健康医学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
博士（人間健康科学）	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	12
博士（薬学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	774
博士（薬科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
博士（工学）	1	0	1	0	0	0	1	0	1	2	4,211
博士（農学）	0	0	0	1	0	1	0	1	1	2	2,914
博士（人間・環境学）	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	56
博士（エネルギー科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	64
博士（地域研究）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32
博士（情報学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	97
博士（生命科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28
博士（地球環境学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16
総計	9	3	12	3	1	4	8	1	9	25	13,576

※留学生は無し

大学の
動き

■博士課程教育リーディングプログラム（博士課程の内数）

プログラム名	学位授与者数（下段は留学生の内数 [*] ）									総計	累計
	2023年5月23日付			2023年7月24日付			2023年9月25日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
京都大学大学院思修館	0	0	0	0	0	0	3	0	3	3	35
	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	
グローバル生存学大学院連携プログラム	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	51
充実した健康長寿社会を築く総合医療開発リーダー育成プログラム	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30
デザイン学大学院連携プログラム	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	31
霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院	0	1	1	1	0	1	0	1	1	3	28
	0	1	1	1	0	1	0	1	1	3	
総計	0	1	1	1	0	1	3	1	4	6	175
	0	1	1	1	0	1	1	1	2	4	

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

■卓越大学院プログラム（博士課程の内数）

プログラム名	学位授与者数									総計	累計
	2023年5月23日付			2023年7月24日付			2023年9月25日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
先端光・電子デバイス創成学	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	25
メディカルイノベーション	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
総計	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	29

※留学生は無し



式典の様子

（教育推進・学生支援部（教務企画課））

[目次に戻る ↗](#)

令和5年度大学院秋季入学式を挙

10月7日(土)、百周年時計台記念館において、湊 長博 総長、教育・学生・入試担当理事、関係部局長などの出席のもと、令和5年度大学院秋季入学式を挙行しました。

式典では、湊総長による式辞がありました。

入学者数は次のとおりです。

令和5年秋季 修士課程入学者数

区 分	入 学			左記のうち留学生数 [※]		
	男	女	計	男	女	計
経済学研究科	6	20	26	2	11	13
理学研究科	8	2	10	8	2	10
薬学研究科	0	1	1	0	1	1
工学研究科	1	0	1	1	0	1
農学研究科	5	6	11	5	6	11
エネルギー科学研究科	3	5	8	3	5	8
情報学研究科	11	0	11	10	0	10
生命科学研究科	6	3	9	6	3	9
地球環境学舎	1	5	6	1	5	6
総 計	41	42	83	36	33	69

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

令和5年秋季 修士専門職課程入学者数

区 分	入 学			左記のうち留学生数 [※]		
	男	女	計	男	女	計
医学研究科	0	2	2	0	0	0
経営管理教育部	3	0	3	0	0	0
総 計	3	2	5	0	0	0

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

令和5年秋季 博士(後期)課程入学者数(下段は留学生数 内数[※])

区 分	進 学			編入学			中計		総計
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	
経済学研究科	0	1	1	4	3	7	4	4	8
	0	1	1	3	3	6	3	4	7
理学研究科	0	2	2	9	4	13	9	6	15
	0	2	2	6	2	8	6	4	10
薬学研究科	0	0	0	1	1	2	1	1	2
	0	0	0	0	0	0	0	0	0

大学の
動き

区 分	進 学			編入学			中計		総計
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	
工学研究科	0	1	1	27	11	38	27	12	39
	0	1	1	16	9	25	16	10	26
農学研究科	3	4	7	3	7	10	6	11	17
	3	3	6	3	7	10	6	10	16
エネルギー科学研究科	3	0	3	2	3	5	5	3	8
	2	0	2	1	3	4	3	3	6
情報学研究科	5	1	6	13	5	18	18	6	24
	4	1	5	8	5	13	12	6	18
生命科学研究科	4	3	7	0	3	3	4	6	10
	4	3	7	0	3	3	4	6	10
地球環境学舎	0	0	0	5	10	15	5	10	15
	0	0	0	4	8	12	4	8	12
総 計	15	12	27	64	47	111	79	59	138
	13	11	24	41	40	81	54	51	105

※留学生数は在留資格「留学」のみの数



式辞を述べる湊総長



式典の様子

(教育推進・学生支援部(教務企画課))

[目次に戻る ↗](#)

学生2名に令和5年度「京都大学総長賞」を授与

学業・課外活動・社会貢献活動などにおいて顕著な活躍をし、本学の名誉を高めた学生および学生団体を表彰する制度「京都大学総長賞」を設けています。

例年のスケジュールでは、秋ごろに候補者を募集し、翌年春に表彰式を実施していますが、2023年5月に経済学部の神谷康成さんと榎田琢人さんが、路上で倒れていた心肺停止の男性に適切な心肺蘇生処置を行い、男性は社会復帰するまで回復することができたことから、9月12日(火)に当該学生2名に「京都大学総長賞」授与を決定し、表彰式を挙行了しました。

大学の
動き

表彰式では、湊 長博 総長が表彰状などの授与および講評を行った後、湊総長と受賞者が人命救助の様子や当時の心境について懇談し、和やかな雰囲気の中、閉式となりました。

令和5年度総長賞受賞者一覧

被推薦者・団体名	推薦対象分野	推薦理由・受賞歴等
経済学部経済経営学科1回生 カミヤ コウセイ 神谷 康成 経済学部経済経営学科1回生 クシダ タクト 榎田 琢人	社会	2023年5月31日(水)に、経済学部1回生の神谷康成さんと榎田琢人さんの2名が左京区高野あたりを通りかかったところ、路上で倒れていた心肺停止の50代男性のご家族(妻、娘)から依頼を受け心肺蘇生処置を行った。救急隊員が到着するまでの数分間の間に適切に処置したことにより、男性は一命を取り留め、その後社会復帰するまで回復することができた。学生の処置がなければ男性が社会復帰するまで回復することは難しく、非常に効果的な措置であったとのことである。 このことから、当該学生2名には7月10日に左京区消防署より感謝状が贈呈された。

【関連リンク】

京都大学大学院経済学研究科・経済学部 - NEWS&INFORMATION

<https://www.econ.kyoto-u.ac.jp/blog/student/38039/>



懇談の様子



受賞者および関係者

(教育推進・学生支援部(厚生課))

[目次に戻る ↗](#)

「京都大学 ELCAS2023」を開催

高校生のための体験型科学講座「ELCAS(エルキャス)」を、8月22日(火)～25日(金)に開催しました。本年度は、【講義型】と【演習型】の2つのプログラムを実施し、全国から高校1年生・2年生が参加しました。

【講義型】は、延べ約840名の申込者を対象に、対面とオンラインで実施されました。教員は、附置研究所・センターで高度な研究活動を展開する研究者らが担当し、



【講義型】「人魚の歌声～音を使ってジュゴンの秘密を解き明かす～」

大学の
動き

9つの多彩なテーマの模擬授業を行いました。授業終了時には、多くの質問が寄せられ、活発に質疑応答が行われました。参加した受講生からは、「高校の授業で生まれた興味・関心を追求していける大学の講義の雰囲気味わうことができた」、「高校の授業では聞けないような専門性の高い授業で楽しみながら受講できた」などの感想が寄せられました。

【演習型】は、選考を経た受講生を対象に、研究室などで実施されました。文系・理系合わせて12講座を開講し、教員は本学で学生指導にあたる研究者や博士後期課程に在籍する若手研究者らが担当しました。参加した79名は、講座毎に分かれ、初対面の仲間との共同作業やディスカッションに励みました。参加した受講生からは、「最先端の技術や機械、さらには研究内容を活かした実験ができてとても面白かった」、「最初は大変緊張したが、別の高校の生徒とすぐ打ち解けることもできた。先生も気さくに声をかけてくださり、安心して演習を受けることができた」、「同じ分野に興味を持つ人々と、疑問や知識を共有し新たなアイデアを生み出す場にいられたことは、私にとって良い経験になった」などの感想が寄せられました。

今後も本事業を通じて、主体的に学問を究めようとする高校生に高度な学術に触れる機会を提供していきます。

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

[目次に戻る ↗](#)

「京都大学アカデミックデイ 2023」を開催

9月24日(日)にゼスト御池(京都市役所前地下街)の河原町広場・寺町広場・御幸町広場にて、「京都大学アカデミックデイ2023」を開催しました。13回目となる今年は、学部・大学院生含む131名(34組)の研究プロジェクトが対話の場に参加し、来場者は880名に上りました。

「京都大学アカデミックデイ」は、誰もが学問の楽しさ・魅力に気付くことができる「対話」の場となることを目的として、「国民との科学・技術対話」事業の一環として実施しています。今年は、京都大学アカデミックデイ単独のイベントとして初めて学外会場での開催となりました。



研究者と立ち話



ちゃぶ台囲んで膝詰め対話

大学の
動き

お茶を片手にトーク◎トーク



研究者の本棚

さまざまな来場者との対話を促すため、「研究者と立ち話」、「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話」、「お茶を片手にトーク◎トーク」、「研究者の本棚」の4つの企画を実施しました。今年は、京都大学アカデミックデイになじみのない参加者も多いと想定して、出展ブースを紹介する出展者ピッチプレゼンや、本にまつわる座談会を実施しました。また、JSTサイエンスアゴラとの共催企画（サイエンスアゴラ in 京都「アカデミアの現場からみたグローバリズム」（共催：国立研究開発法人科学技術振興機構））も実施しました。

企画のデザインや運営は、学術研究展開センター（KURA）、研究推進部研究推進課および「国民との科学・技術対話」ワーキンググループが協働して進めました。今回の開催の経験、参加者からの意見を参考にしながら、今後の対話活動をさらに発展させていきます。

【関連リンク】

京都大学アカデミックデイ 2023

<https://research.kyoto-u.ac.jp/academic-day/a2023/>

（学術研究展開センター、研究推進部（研究推進課））

[目次に戻る ↗](#)



第16回次世代グローバルワークショップを開催

京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU) は、第16回次世代グローバルワークショップを、9月29日(金)、30日(土)に開催しました。

今年のワークショップは、「Migration and Quality of Life: Harnessing the Potential for Social Prosperity」をテーマに掲げ、コロナパンデミックによる3年間のオンライン開催を経て、ようやく対面形式の開催に戻りました。

世界中の大学院生・若手研究者から約80通の参加の応募申請があり、その中から選出された、インド、フィリピン、シンガポール、ドイツ、アメリカ、日本などの8カ国の若手研究者26名が8つのセッションで報告を行いました。発表のテーマは多岐にわたり、移民と戦争、労働、結婚、法制度、宗教、エスニシティ、アイデンティティなど、多様な領域で議論が展開されました。また、14名の大学教員がアドバイザーとしてワークショップに参加し、若手研究者の論文と発表にコメントを行いました。

最終日のWrap Up Sessionでは、「自分のトピックだけでなく、他人の研究にも関心を持つようになり、海を跨いだ学術の協力関係を構築できた」など、多くの参加者から感想が寄せられました。

アジア研究教育ユニットでは、引き続き次世代の研究者が英語での学術交流が行いやすい環境づくりに尽力し、本ワークショップをきっかけに、多くの若手研究者が世界に羽ばたいていくことを期待しています。



吉田神社ウォーキングツアーにて



参加者の集合写真

(大学院文学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

人文科学研究所人文情報学創新センターの開所式を挙

人文科学研究所は、10月1日(日)付けで附属研究施設である「東アジア人文情報学研究センター」を改組し、新たに「人文情報学創新センター」を設置しました。それに伴い、同月2日(月)に人文科学研究所分館(人文情報学創新センター北館)にて、新センターの開所式を挙りました。

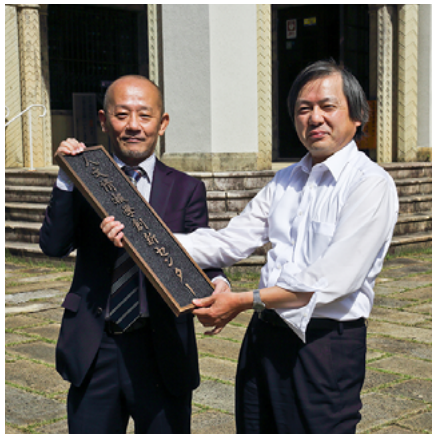
開所式では、人文情報学創新センター主任の安岡孝一 教授による開式の辞に続いて、センター長を兼務する岩城卓二 人文科学研究所長が挨拶を行いました。

人文科学研究所は、1965年に東洋学文献センターを設置して以降、2000年に漢字情報研究センター、2009年に東アジア人文情報学研究センターへと改組しながら、漢字史料の研究と情報化を進めてきました。また、2010年代以降は、「みやこの学術資源研究・活用プロジェ

部局の
動き

クト」を組織し、企業・団体・個人などが所蔵する近現代日本社会に関わる諸史料の収集・整理も行ってきましたが、本プロジェクトを通じて、これからの人文学研究にとって重要な学術資源が逸失してしまう危機にあることが分かりました。

そこで、東アジア人文情報学研究センターのノウハウを近現代史料にも応用し、史料の形態や種別にかかわらず汎用的な学術資源の情報化・情報発信に取り組むため、改組することとしました。人文情報学創新センターは、中国伝世文献史料から近現代日本社会史料に及ぶ多様な人文学学術資源の情報化の方途を開拓すると同時に、研究者と市民が同じ史料群に向き合い、この時代にふさわしい新価値創出のために協働して社会に発信するという「市民との協働」を重視し、人文学の新共創モデルの構築を目指していきます。



看板お披露目の様子（左から、岩城所長、安岡教授）



集合写真

(人文科学研究所)

[目次に戻る ↗](#)

「宇治キャンパス若手研究者交流会」を開催

宇治キャンパスでは、昨年10月の宇治キャンパス公開に湊 長博 総長が来訪した際、湊総長と宇治キャンパスで活動する4研究所の若手研究者との座談会を開催し好評であったことから、今年10月19日(木)に、研究所の枠を超えた宇治キャンパス全体の若手研究者の交流機会として、「宇治キャンパス若手研究者交流会」を開催しました。

交流会は、生存圏研究所木質ホールを会場として開催し、発表および議論に参加した15名の若手研究者のほか、約30名の研究者および学生が参加しました。中北英一 防災研究所長



久富助教



篠北助教



陳助教



岡田特定研究員

部局の
動き

の司会により、それぞれの研究所を代表して、久富隆佑 化学研究所助教、篠北啓介 エネルギー理工学研究所助教、陳 碩也 生存圏研究所助教、岡田夏美 防災研究所特定研究員が研究内容を紹介するプレゼンを行った後、多様な研究分野の視点から活発な質疑応答が行われ、交流を深める機会となりました。

交流会は、山本 衛 生存圏研究所長の挨拶により締めくくられ、参加者は、引き続きキャンパス公開懇親会の会場に移動し、和やかな雰囲気の中で、研究所の枠を超えた自由な交流が行われました。



質疑応答の様子



全体の様子

(宇治地区事務部)

[目次に戻る](#)

「ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム (HFSP) から世界へ」を開催

学術研究展開センター (KURA) は、「ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム (HFSP) から世界へ」を、10月5日 (木) に芝蘭会館山内ホールで開催しました。

ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム (HFSP) は、ライフサイエンス分野における革新的な国際共同研究を推進するため、1989年に創設された国際プロジェクトです。本イベントでは、HFSP 機構、国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED) が共催となり、研究者向けの研究グラント、ポスドク向けのフェローシップについて、本学や理化学研究所の過去の採択者や審査委員が、経験談も交えながらプロジェクトの内容を紹介しました。

湊 長博 総長は、冒頭の挨拶で「HFSPは非常に名誉のある国際グラントであり、昨今は応用や産学連携に特化した研究資金が多い中、基礎研究に特化しているのはとても貴重。ぜひ、果敢に応募していただきたい」と呼びかけました。そ



湊総長による挨拶



カバット事務局長による説明



の後、パベル・カバット HFSP 事務局長が、研究グラントの採択者から多くのノーベル賞受賞者を輩出してきた点に触れつつ、研究グラントとフェローシップの公募事業について説明しました。

本イベントには約90名が参加し、研究グラントに申請する際の工夫や審査の過程について多くを学ぶ機会となりました。今後、本学からHFSPへの応募が増えていくことが期待されます。

(学術研究展開センター)

[目次に戻る ↗](#)

自ら考え やりきる力

寺田 健志



京都大学に強い憧れを抱いていた私は、高校3年の時、色弱で希望学部を受験できないと知り、進路に悩みながらあてもなく本部構内を歩いていました。工学部石油化学科の建物前で福井先生のノーベル化学賞受賞記念石碑に気づき佇んでいたところ、通りがかりの先輩が私に声を掛け、研究室を案内してくれました。これが、私が京都大学工学部石油化学科を受験し、入学するきっかけでした。

学生は勉強が本分ですが、学生時代を謳歌したいと考えた私は、野球サークル、バンド活動、自動車競技と色んな集まりに参加し交友関係を築きました。遊興費、下宿代、授業料等の全てをアルバイトで賄うため、家庭教師のみならず、家電製品の配達、商品梱包と何でもやりましたが、苦労というよりは社会勉強として楽しい経験をさせてもらっている感覚でした。肝心の研究そのものは苦手でしたが、こんな私でも何とか単位を取り、論文を無事仕上げる事ができたのは、先生方の私(各個人)に合った適切なお指導の賜物と感謝をしています。

私はその後、化学メーカーに就職するも、研究者歴は数年のみで、営業・企画畑を歩み、長い海外勤務を経て現在に至ります。その中で感じたのが、海外企業に比較して日本企業、特に製造業の意思決定の遅さや無駄な業務の多さからくる生産性の低さ、新しくものを生み出す力の欠落でした。京大工学部出身にもかかわらず、研究開発において世間に貢献をすることが出来なかった私が、経営者となった今果たすべき責務は、日本の、特に古い体質の製造業の生産性を高めること、少なくとも自身が世話になった会社を変革することだと認識しています。

そこで、社員が能力を存分に発揮できる会社に変化すれば、業績は後からついてくるという考えのもと、ここ数年は会社業績よりも業務改革を強力に推進してきました。職掌を問わず生産性の上がる仕事の仕方、進め方に改めること、そして、社員全員が業務を通じて勉強し考え抜き、周囲と議論し、決定したことは最後までやりきる。そうした底力を養うことを目標としています。その結果、製造、営業部門はもちろんのこと、研究開発、生産技術開発等においても世界で戦えるスピード、創造力が強化されると信じています。社員からは、突飛なことを言い出す変わった社長と思われるようですが、会社の変革のために、今後も古い慣習にとらわれない柔軟な発想で施策や制度改革を打ち出し遂行していく考えです。

私は世の経営者の方々とお会いし、各種課題解決について相談させていただく機会が多いのですが、やはり京大出身の経営者の一般とは一味違う、自由で前例にとらわれないダイナミックな発想にとっても刺激を受けます。これは大学時代に既成概念にとらわれない自由な発想と、その実行が日常的であったからに他ならない。京都大学は知識、方法論の詰め込みではなく、自分で考え抜き、自由な発想を以って物事を生み出す力と実行力を育成する場所。仲間と徹底的に議論をし、意思決定して実行に移すには、コミュニケーション力が重要であることも発信し続けていきたいと思っています。

(てらだ けんし、株式会社大阪ソーダ代表取締役社長執行役員、昭和63年工学部卒業)

[目次に戻る](#)

随想

科学をめぐる事情の転変

名誉教授 石黒 武彦



21世紀の開幕を前に、科学とそれによる技術は新世紀にどのように展開するだろうかと思いを巡らせたが、歴とした変化を感じ取ることなく当時を越えた。しかし、10年を経るころから目覚ましい転変の渦中にあることを感受させられている。最近では、絶滅したマンモスを復活させる取り組みがあることに驚かされるかと思えば、突然現れた生成人工知能が人間の知性と創造性の立ち位置に黄信号を点灯させていることに気付かされる。また、宇宙の構造と根源の物語がコンピュータグラフィクスで茶の間に紹介されつつある一方で、驚異的な処理能力を持つ量子コンピュータが開発されている。

科学と社会の関係も著しく変化している。バイオテクノロジーの威力が明らかになり始めたころ、遺伝子組み換え食品を受け入れるか否か、科学が繰り出すものについて社会が審査する頃合いがあった。ところが、次々と新たに差し出されるものに付き合っただけでなくなったかのように、科学と技術の社会への普及状況に意見を述べ立てて見直しを求めるチャンスが失われつつある。さらに、情報通信技術は、監視し統制する手段ともされ、一編の見解を遍く拡げることによって社会の在り方を揺るがせるようなことに使われ、高度な処理能力を持つコンピュータが人間の知的能力を超える異常事態が到来するかもしれないと警戒されている。

知識の集積により構築される科学は、知見の先取性でも特徴付けられる。知り得たものは広く共有されるためだが、科学知識は利益獲得の手段となると共に、さらなる高度化とその推進のために資金と人材が必要とされることが相まって、研究開発をめぐる競争が熾烈化されてきた。科学知識の公開媒体である学術雑誌の発行と頒布が営利化されていることによって、科学者が必要とする論文を手にするのが難しくなるなど、科学をめぐる事情は本来あるべきと思われるようにならなくなっている。また、真理に向き合う科学者は精神を陶冶し、自己を規制することが当然と考えられていたが、科学が拡充繁茂する中で、その場凌ぎの不正を防ぎきれなくなっている。

技術文明を招来し、人類にメリットをもたらしてきた科学だが、社会をリスクに向き合わせる面が目立つようになっている。世紀の変わり目にその先を考えたとき、未知の領域で出会う事柄についても、人間の主体性を前提とした予定調和によって危機が回避されることを期待していたが、安心できる状況にはない。科学と技術は人間の意図を超えて拡大発展を遂げるような面を見せつつあるが、その開拓と活用には常に人間が介在する。科学の行方が人類にとって希望的なものであるためにどのように取り組むべきかが真剣に問われるべき段階にあると思う。

(いしぐろ たけひこ、平成14年退職、元理学研究科教授、専門は物性物理学、科学社会学)

[目次に戻る ↗](#)

洛書

研究はマラソンに似ている？

近藤 圭介



「研究はマラソンに似ている」という言葉を聞いたことがある。聞いた時はピンとこなかったのが、同僚の誘いに乗ってランニングを始め、実際にマラソンの大会に参加するようになって、この言葉に思うことが出てきた。この文章は、そんな研究者兼駆け出しの市民ランナーの雑感である。なんでもかんでも

マラソンに喩えたがるという初心者ランナーの悪癖の発露といえそうだが、ご容赦いただきたい。

マラソンに喩えられる研究は、どういった種類のものだろうか。私の偏った知識に基づくのでどこまで適切かは定かでないが、それほど長くない期間で遂行され、論文などで公表される研究は、どちらかといえば短距離・中距離種目に似ていると言えそうだ。複数の研究者が協力して実施する研究などは、むしろ駅伝の喩えの方が適切かもしれない。そうすると、マラソンに相当するのは、一人の研究者が長期間かけてあるテーマに対して体系的に取り組む、モノグラフに結実するような研究であろう。私が(その周縁部においてではあるが)所属する法学分野では、こういった研究が主流である。

マラソンもそれに喩えられる研究も、まずは長さに耐えうる準備が必要になる。マラソンを完走するのに日頃からのトレーニングや体調管理が欠かせないのと同様に、研究もまた日常的に自身の専門分野における研究動向をきちんと把握しておく必要がある。しかし、それ以上に重要なのは、その長い過程の中で生じる様々な問題に対処しながらやり抜く意志である。マラソンでは、走り出してから様々な困難が立ちはだかる。脚が痛くなってきた、疲れてペースが維持できない、他のランナーに抜かれるなど枚挙にいとまがない。研究も同じである。ある箇所の論証がうまくいかない、執筆が行き詰まってきた、同じような研究が先に出版された、というのはよくある話だ。

私の現在の研究テーマは、一言でいえばグローバル化による法の捉え方の変容についてである。これまで、法は明示的あるいは黙示的に国家という政治的単位に関連づけて語られることが一般的であったところ、グローバル化がこの捉え方にいかなる影響を与えうるか、それに代わる捉え方に必要な理論や概念はどのようなものか、試行錯誤しながら取り組んできた。この間、その成果を部分的に形にしてきたが、モノグラフとして公表するに至ってはいない。

この夏、週末を利用して北海道マラソンに参加してきた。季節の割に走りやすいとの評判を聞いていたが、スタート時点で30度を超える気温に途中から雷雨も加わり、蓋を開けてみると過酷な大会だった。私自身、序盤は調子良く走っていたが、気温や湿度の影響から中盤にかけて大失速。何度も立ち止まり、途中棄権も頭をよぎった。だが、気力を振り絞ると後半はペースを取り戻し、やっとの思いでゴールまでたどり着いた。

ゴールしてから少しして、私の研究はこのマラソンに似ているな、とふと思った。最初は時流に乗ったテーマということもあって順調に進めていたが、堅固に構築された見方や前提を突き崩すという課題の帯びる困難さや複雑さに思いが至って立ち往生を繰り返し、頓挫しかけた。とはいえ、当初よりも歩みは遅いが、現在でも少しずつ前には進んでいる。そういうわけで、マラソンと同じように、研究もペースを取り戻して、なんとかゴールしたい。

(こңどう けいすけ、法学研究科准教授、専門は法理学)

[目次に戻る ↗](#)

栄誉

玉尾皓平 名誉教授が文化勲章を受章

玉尾皓平 名誉教授が令和5年度文化勲章を受章され、11月3日(金)に皇居において親授式が行われました。

玉尾名誉教授は、昭和40年京都大学工学部を卒業、昭和42年同大学大学院工学研究科修士課程、昭和45年同研究科博士課程を単位取得退学し、同時に同大学助手に採用され、昭和46年京都大学工学博士の学位を授与されました。昭和61年同学部助教授、平成5年同大学化学研究所教授に昇任、平成12年より2年間、同研究所所長を務められ、平成17年京都大学名誉教授の称号を受けられました。現在も、理化学研究所荣誉研究員、豊田理化学研究所所長としてご活躍中です。



玉尾名誉教授は、有機合成化学、有機金属化学の分野において、「元素の本質に根差した新物質創成」を研究の基本命題に掲げ、特に有機ニッケル化学や有機ケイ素化学に関して、基礎から応用まで卓越した論理性をそなえた独創的な研究手法で数多くの新反応発見及び新化合物生成に成功するなどの優れた業績を挙げ、斯学の発展に多大な貢献をされました。

これらの卓越した業績に対して、日本化学会賞、朝日賞、東レ科学技術賞、アメリカ化学会F・S・キャッピング賞、向井賞、日本学士院賞など、多数の賞が授与されています。さらに、平成16年には紫綬褒章、平成28年には瑞宝重光章を受章され、平成23年には文化功労者として顕彰されました。

【関連リンク】

公益財団法人豊田理化学研究所

<https://www.toyotariken.jp/info/>

京都大学化学研究所 (関連記事)

https://www.kuicr.kyoto-u.ac.jp/sites/news/award_20231023/

(化学研究所)

[目次に戻る ↗](#)

栄誉

森 和俊 理学研究科教授が第28回慶應医学賞を受賞

森 和俊 理学研究科教授が、第28回慶應医学賞を受賞しました。今回の受賞は、研究テーマ「小胞体ストレス応答の分子機構の解明」に対するものです。

慶應医学賞は、世界の医学・生命科学の領域において医学を中心とした諸科学の発展に寄与する顕著、かつ創造的な研究業績をあげた研究者に対して、慶應義塾医学振興基金が与える学術賞です。過去には、本賞受賞者からノーベル賞受賞者を9名輩出しており、今後さらなる世界的な活躍が期待されています。

【関連リンク】

慶應義塾医学振興基金-第28回受賞者決定

<https://www.ms-fund.keio.ac.jp/news/prize/2023/09141600.html>

(大学院理学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

**山下真由子 理学研究科准教授がマリアム・ミルザハニ・ニューフロンティア賞を受賞**

9月14日(木)にブレイクスルー賞の発表があり、山下真由子 理学研究科准教授が、その中のひとつである優れた若手女性数学者に贈られるマリアム・ミルザハニ・ニューフロンティア賞を受賞しました。今回の受賞は、「数理解物理学、指数定理への貢献」が評価されたものです。

ブレイクスルー賞は、セルゲイ・ブリン氏(Googleの共同創業者)、マーク・ザッカーバーグ氏(Facebookの創業者)らによって設立された国際的な学術賞です。マリアム・ミルザハニは女性で初めてフィールズ賞を受賞したイラン人数学者で、マリアム・ミルザハニ・ニューフロンティア賞は若手女性数学研究者に贈られます。数学でブレイクスルー賞を日本人が受賞するのは、2021年の望月拓郎 数理解析研究所教授以来です。

【関連リンク】

BREAKTHROUGH PRIZE ANNOUNCES 2024 LAUREATES IN LIFE SCIENCES, FUNDAMENTAL PHYSICS, AND MATHEMATICS

<https://breakthroughprize.org/News/83>

(大学院理学研究科)

[目次に戻る ↗](#)



話題

学生総合支援機構が「障害者雇用優良事業所等京都府知事表彰」を受賞

学生総合支援機構は、9月5日(火)に「障害者雇用優良事業所等京都府知事表彰」を受賞しました。

「障害者雇用優良事業所等京都府知事表彰」は、障害のある方を積極的に多数雇用している事業所、雇用の促進と職業の安定に著しく貢献した団体または個人、障害と向き合いながら長く勤務されている個人の方に対して贈られるものです。教育機関が本表彰を受けるのは初めてであり、障害のある人の社会進出における高等教育機関の役割が評価された形となりました。

学生総合支援機構は、障害のある学生を支援するための専門部門として「障害学生支援部門(DRC)」を設置しています。DRCでは、障害のある学生への合理的配慮の提供など、高等教育機関として必要となる修学支援をはじめ、各種プログラムを実施してきました。一方で、障害のある学生の社会進出にあたっては、国の制度や地域の支援資源、また現時点での企業の雇用状況において、少なからず課題が存在し、本学の障害のある学生にとっても障壁のひとつになっています。中でも、従来型の障害者雇用のあり方では大学生という層を加味できておらず、結果として障害のある学生の有効な社会進出のルートが描ききれないことは大きな課題でした。このような状況に対して、DRCが企業や地域の支援資源と連動した「(障害のある学生向けの)社会移行支援プログラム」を実施してきたことが、今回特に評価され、本表彰を受けることになりました。

また、DRCでは、学外への貢献活動として、文部科学省の補助事業にもなっている「高等教育アクセシビリティプラットフォーム(HEAP)プロジェクト」を実施しており、この活動を通じて、全国の大学や地域社会に向けて、それらのモデルやノウハウを提供しています。学内外を問わず、障害のある学生や大学等の高等教育機関をサポートしていることも併せて評価されました。

障害のある学生の修学支援や社会移行支援(就労支援)には、今なお課題が多く残されているのも事実であり、本学での取り組みや支援体制にも改善点は残されています。引き続き、取組の促進・強化、高等教育や社会における障害に関する課題解決に取り組んでいきます。

【関連リンク】

DRC(障害学生支援部門)

<https://www.assdr.kyoto-u.ac.jp/drc/>

HEAP(高等教育アクセシビリティプラットフォーム)

<https://www.assdr.kyoto-u.ac.jp/heap/>

(教育推進・学生支援部(学生課))



授賞式の様子(右:村田 淳 学生総合支援機構准教授(DRC チーフコーディネーター))

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、異友正 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。
以下に同氏の略歴、業績等を紹介いたします。

異友正 名誉教授

異友正先生は、令和5年8月31日に逝去されました。享年100。

先生は、昭和17年9月第三高等学校、昭和20年9月東京帝国大学理学部物理学科を卒業後、同大学大学院を経て、昭和21年10月京都帝国大学理学部副手に採用されたのち、昭和24年4月京都大学理学部助手、昭和30年1月同学部助教授、昭和40年6月同学部教授に昇任され、同学部物理学科流体物理学講座を担当されました。昭和58年4月から昭和60年3月まで、理学部長として大学の管理運営に尽力されました。昭和61年3月定年により退職され、京都大学名誉教授の称号を授与されました。同年4月広島工業大学教授に就任し、昭和63年5月同大学を退職、同年6月京都工芸繊維大学長に就任し、平成6年5月任期満了により退職、同年6月京都工芸繊維大学名誉教授の称号を授与されました。同年10月から平成8年9月まで、国際高等研究所副所長に就任され、平成6年より8年間、京都市教育委員を務められました。



この間、流体物理学の分野、特に流れの安定性理論、完結仮説に基づく乱流の統計理論、さらに電磁流体力学などにおいて数多くの輝かしい研究業績を挙げられ、多くの後進を育てられました。なかでも、一様等方性乱流の統計理論におけるいわゆる完結仮説の研究は、中心的なものであり、キュムラント展開という統計理論の手法を用いて、乱流の相似法則を議論し、特に2次元乱流の性質を明らかにされ、それらの研究において先駆的かつ指導的役割を果たされました。また、晩年には、交差独立性という新たな完結仮説を提案されました。昭和56年4月から昭和60年3月まで、科学研究費 特定研究領域「乱流現象の解明と制御」の代表者を、昭和58年9月には国際理論応用力学連合主催の国際シンポジウム「流体における乱流とカオス現象」(京都)の主催者を歴任されました。また、昭和57年の日本流体力学会の制度化にも貢献されました。

これらの卓越した業績により、平成12年に勲二等瑞宝章、平成21年に全国日本学士会からアカデミア賞(文化部門)を受けられました。

(大学院理学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

訃報

金子 佳生 教授

金子佳生先生は、令和5年8月20日に逝去されました。享年64。

先生は、昭和57年大阪大学工学部建築学科を卒業、同年清水建設株式会社に就職し、以後多くの建築構造設計に携わられました。設計業務を通じて培った構造物の破壊・損傷への知見をさらに研鑽するため、米国マサチューセッツ工科大学大学院工学研究科土木工学専攻へ留学され、平成2年2月同院修士課程、平成4年4月同院博士課程を修了し、その研究結果を博士論文としてまとめられました。

帰国後、研究成果を超高層建築の構造設計業務に反映させ、応力集中箇所の設計に三次元有限要素法を適用するなどの画期的な手法を実行に移されました。構造設計および留学研究によって蓄積した知見の高度化を図り、同時にその成果を建築教育にも還元させるため、活動の場を大学に移し、平成11年4月東北大学大学院工学研究科助教授に就任されました。

同大学では、建築構造における損傷制御機構および繊維補強セメント系複合材料の研究を精力的に進め、当該分野研究の第一人者としての地位を確立されました。平成20年10月京都大学大学院工学研究科教授に就任され、平成22年5月に論文「セメント系材料を用いたせん断接合の破壊モデルと新しい接合システムに関する研究」により、日本建築学会賞(論文)を受賞されました。

先生が目指されたのは、地域防災を念頭に置いた建築構造物の質的な性能向上と長寿命化であり、セメント系複合材料やステンレス合金を活用した新材材の開発を通じ、架構全体の構造性能評価手法を提案し、材料・構造の数値モデルに基づく幅広い研究領域を開拓されました。

先生の独創性を重んじる研究姿勢は教育面においても貫かれており、研究室では学生の自由と自主性を尊重されました。この教育スタイルに学生諸氏は積極的に応じ、研究テーマの選択、実験・解析計画の立案と遂行の一切に自ら取り組み、多くの成果を残しています。

研究・教育に全力を傾注される中、令和3年12月から癌によって休職のやむなきに至り、1年8ヵ月の闘病の末に逝去されました。そのご無念は察するに余りありますが、先生の遺した成果は薫陶を受けた若手研究者・技術者らが引き継ぎ、さらなる発展を担っています。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)